茨城大学ダイバーシティ推進室

NEWS LETTER

2025/04

vol.38

茨城大学
Ibaraki University

茨城大学
ダイバーシティ推進室
Office of Equality and Diversity

CONTENTS

・ダイバーシティをテーマとした学長との意見交換会を開催しました【資料掲載】

イベント

ダイバーシティをテーマとした学長との意見交換会を開催しました。

令和７年３月１１日（火）に令和６年度のダイバーシティをテーマとした学長との意見交換会を開催しました。

女性エンパワーメント支援制度を利用した９名の教員のうち理学野 諸岡歩希准教授、応用生物学野 高瀬唯講師、教育学野 李満紅助教、に研究紹介をしていただいた後、「女性の研究力強化と上位職への登用の促進のためにできること」をテーマとして、学長との意見交換を行いました。当日は約４０人が参加しました。

次ページ以降に女性エンパワーメント支援制度採択者９名の報告を添付しております。ぜひご一読ください。

女性エンパワーメント支援制度報告添付！

1. 笹野　美佐恵　講師（人文社会科学野）
「アジア5都市の少子化に関する総合的研究：価値観・実態・制度の比較」
2. 池庄司 規江 准教授（教育学野）
「災害記憶の継承システムの構築－地域と学校への社会的実装に向けて―」
3. 李　満紅 助教（教育学野）
「日中における初等・中等国語科教育法の共同研究と開発
－魯迅と日本文学を中心に－」
4. 二橋　美瑞子　准教授（基礎自然科学野）
「昆虫の微細構造形成の分子メカニズムの解析」
5. 諸岡　歩希　准教授（基礎自然科学野）
「農村地域における社会生態系の変容と共存する昆虫類の遺伝的多様性の変化」
6. 福村　真紀子 助教（応用理工学野）
「地方観光地における「ダイバーシティ・マネジメント」のための調査研究」
7. 浅木　直美　准教授（応用生物学野）
「ウコンによる窒素吸収とクルクミン含有率との関係解析」
8. 高瀬　唯　講師（応用生物学野）
「地域社会における自然体験の世代間伝承に関する行動の既定要因の解明」
9. 七夕　小百合　准教授（応用生物学野）
「ダイズにおける根粒形成オートレギュレーションと免疫応答の関連性の解明」

R６年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：笹野　美佐恵

研究テーマ：アジア５都市の少子化に関する総合的研究ー価値観・実態・制度の比較ー

研究内容の紹介

本研究は、アジア5都市（東京、ソウル、台北、上海、シンガポール）における少子化の背景要因を、価値観・実態・制度の3つの側面から総合的に理解することを目的としています。少子化は、複合的要因によってもたらされており、多くの既存研究で社会・経済・文化的要因について指摘されています。一方、私は、「圧縮的近代」を経験した東アジアでは、女性の高学歴化が短期間で急速に進み、これが女性の生き方や価値観に革新的な変化をもたらしている点に着目しています。そして、その変化に既存の社会構造や価値観が追いつかず、世代間・ジェンダー間の衝突が大きくなっていると考えています。そこで、「圧縮的近代」と「ジェンダー関係の変化」に着目した研究を行なっており、加速度的に進む東アジアにおける少子化の背景要因の異同を国際比較を通じて明らかにすることを目指しています。

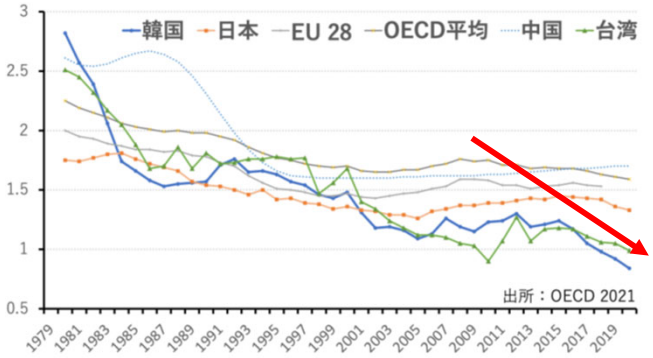
2024年度（R6年度）は研究初年度として、特に価値観の変化に焦点を当てた分析を進めました。ソウル大学アジア研究所が実施した「アジア大都市価値観調査」（2022年）を用いて、少子化に関連する価値観の多角的な分析を行いました。このデータを活用し、家族観・ジェンダー意識・社会的信頼・公平性の認識などが、少子化にどのような影響を与えているのかを分析しました。

また、本研究は、2023年度に実施した「家族価値変動の国際比較－東アジアと欧米の比較－」の延長線上にあり、昨年度の研究成果を基に、より実証的な国際比較を展開しました。特に、ドイツ・フランスでの在外研究を通じて、統計データからでは読み取れない現地の声や研究者との意見交換を通して、東アジアの家族価値の変化が欧米諸国とどのように異なっているのかについて、新たな知見を得ることができました。

今後は、こうした価値観の変化がどのようなメカニズムで伝播し、少子化に寄与しているのかをより詳細に分析するため、進化生物学との融合研究を進め、数理モデルを用いたシミュレーション分析へと発展させる予定です。

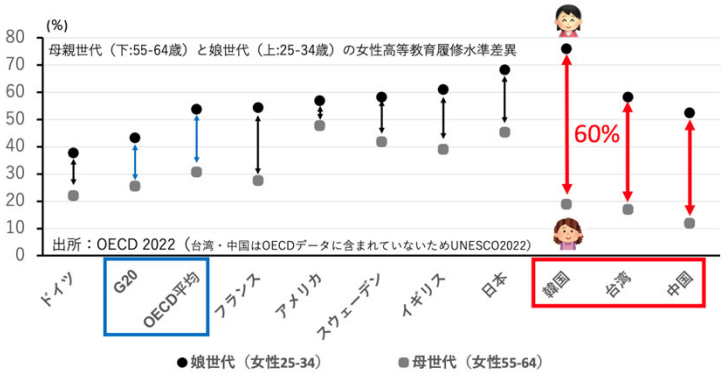
【本研究の問い】

なぜ東アジアの出生率は，加速度的に低下するのだろうか．



【本研究の着眼点】

「女性教育水準の爆発的上昇」とそれがもたらしている
母娘世代の経験するライフコースと価値観の革新的変化



制度を利用した所感

本制度の支援により、国内外における研究活動の促進および研究発信を大きく前進させることができました。特に、本年度はドイツ・フランスでの在外研究および総合研究大学院大学（葉山）での共同研究の推進に制度を活用しました。

夏休みを利用して在外研究で訪れたフランス・ドイツでは、7カ国の若者の家族価値を比較する研究の一環として、現地の研究者との交流を深めることができ、フランスではUniversité Bordeaux Montaigneで特別セミナーも開催して頂き、研究成果を広く発信する機会を得ました。統計データからは読み取ることの難しい欧州における家族価値の変遷を直接調査できたことで、東アジアとの比較分析にさらなる厚みを加えることができました。また、この滞在中に執筆した論文が国際学術誌に掲載されるなど、研究成果の発信にも大いに貢献しました。

一方、数理モデルを用いた進化生物学との融合研究を進めるため、総合研究大学院大学の大槻久先生との共同研究を本格化させるための準備も行いました。2024年6月に人間行動進化学会に入会し、12月の学会にも参加することで、進化行動学の視点から少子化を考察する機会を得ました。また、10月には総合研究大学院大学（葉山キャンパス）を訪問し、講演を行いました。講演後のディスカッションでは大槻先生をはじめ、多くの生物学者と意見交換ができ、今後、共同研究へと発展させるための基盤を築くことができました。

本制度の支援により、国際共同研究の深化と学際的な新たなアプローチの開拓への大きな助けになりました。特に、欧米中心の主流理論とは異なる東アジア独自の視点を構築することを試みる本研究課題は、既存の少子化研究に新たな視座を提供することができるものとなると確信しています。今年度の研究活動を通して得られた知見を深化させ、国際社会への発信を継続していく所存です。引き続き、研究成果の出版支援など、支援を賜れれば幸いです。

この度は本制度を利用する機会をいただき、心より感謝申し上げます。

R6年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：池庄司規江

研究テーマ：災害記憶の継承システムの構築―地域と学校への社会的実装に向けて―

研究内容の紹介

本研究はGISを用いた災害記憶の継承システムを社会実装していくために、①(災害にあった)地域の人びとに対するGIS講習会を実施し、地域の人びとが作り上げた災害アーカイブを活用した②学校教育における防災教育教材パッケージを作ること、(進捗状況によっては)③防災教育教材パッケージの学校教育での社会実証に取り組むことを目標としました。防災教育のパッケージ作成に当たっては、とりわけ「実践的な学び」と「能動的な学び」につながる学習教材の作成に注力しました。

＜ 研究成果 ＞



図1 講習会で示したwebGISに落とし込んだ災害記憶の一例

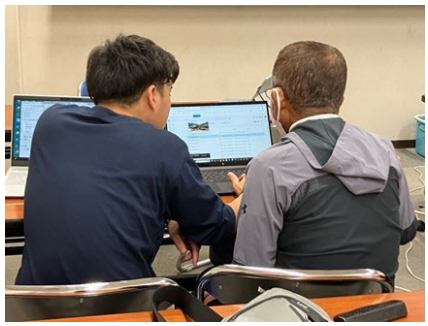


図2 アーカイブ化に取り組む参加者
（2024年11月 池庄司撮影）



図3 教材化のための砂防堰堤のUAV撮影
（2024年11月 池庄司撮影）

本研究は、地域の人びと自らが災害記憶を継承するためのGISとして、その選定から始めました。ArcGISをはじめとしてMapInfo、ZENRIN GIS、QGISなど、有償／無償のさまざまGISソフトが存在するなかで、地域の人びとが操作する点から①簡易な操作性と②web版GISであること、③無償という3点を考慮した結果、Googleマップを選定しました。

2024年11月に広島市安佐北区阿部公民館で2回にわたって防災アーカイブ講習会を行い、多くの市民の皆さまにご参加いただきました。加えて、児童生徒の興味関心を喚起する教材として砂防堰堤のUAV撮影を行い、動画編集を行いました。その際、砂防堰堤と住宅地の距離や比高が感じられるよう留意しました。時間の制約もあり、本年度は学校での社会実証が叶いませんでしたが、次年度以降に実施していきたいと考えています。

制度を利用した所感

本制度で研究発表のための国際学会参加を可能としていただいたため、世界各国からの研究者と直接に議論する機会を得て、多くの学びを得る経験となりました。また、GISの操作習得および防災教育パッケージ構想をゼミ活動として行ったことから、ゼミ生の技術向上や教育実習への援用など、学生の学びにも幅広く生かすことができました。なお、ESRI社のArcGISは高額のため研究室単体では導入が困難です。全学で必要数を確認して発注していただけると、経費削減につながるだけでなく、研究や学習の幅が広がります。ぜひ、検討をお願いします。

R6年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：李 満紅（り まんほん）

研究テーマ：日中における初等・中等国語科教育法の共同研究と開発
—魯迅と日本文学を中心に—

研究内容の紹介

・研究概要

本研究は、文学教材を初等国語科から中等国語科へと段階的に読むことを通して、主体的・対話的で深い学びの実践的な方法を新たに提案するものである。教材としては、日中両国における義務教育の定番国語教材である魯迅「故郷」(1921年発表)を扱う。中国では小学校で「故郷」の少年時代の回想記を学習し、その後中学校で「故郷」全文を学習している。これを参考にして初等国語科と中等国語科をつなぐ新たな教育方法を開発する。また、今の時代に合った「故郷」の新しい日本語訳を開発し、さらに日本の中学校用の「故郷」の補助教材(新訳及び挿絵入り)を作成する。

・研究成果

(一)魯迅研究のための海外調査(中国広東省)：広州魯迅記念館所蔵資料(自筆原稿など)の調査・広州魯迅故居の実地踏査・魯迅の創作活動に多大な影響を与えた夫人許広平の故郷「溝南許地」の実地踏査

調査成果：魯迅の広東時代(1927.1.18～9. 27)は魯迅が創作活動に集中し始めた時期であり、日本文学の翻訳にも精力的に取り組んだ時期でもあった。特に、思い出の作品集『朝花夕拾』(「藤野先生」が収録されている)もこの時期に出版された。国語科の定番教材「故郷」の補助教材になるような作品も多い。魯迅の作品においては土地、風土などは大変重要な要素である。今回の成果は教育法の開発、とりわけ教材化のための日本語訳をするにあたって参考になることが多かった。また、広州魯迅記念館の所蔵資料の調査のみではなく、「魯迅の読書生活」という特別展の開催時期であったため、北京及び上海の魯迅記念館の所蔵資料(魯迅が所蔵していた日本文学の作品、自筆原稿などを含む)の調査もできた。詳細はR7年度中に海外学術雑誌論文として発表する予定である。

(二)魯迅研究のための仙台調査：魯迅の階段教室(旧仙台医学専門学校六号教室)「東北大学史料館魯迅記念展示室・魯迅の仙台時代の下宿先「佐藤屋」の跡地・仙台医専解剖学教授藤野先生宅の跡地の実地調査

調査成果：仙台時代(1904.9～1906.3)は魯迅にとって大きな転換期であった。医学の道をやめ、文学の道を志すことになった時期である。第一創作集『吶喊』(1923)の自序と仙台の思い出を描いた作品「藤野先生」(1926)によれば、医専2年次の授業で見た日露戦争に関する幻灯写真がそのきっかけであった。今回はその幻灯写真を見た階段教室を見学し、仙台医専で使用された幻灯用のガラス板も確認できた(作品中で言及したその画面は見当たらないが、魯迅が実際に見たガラス板も史料館の展示資料に含まれている)。実地踏査は魯迅が生活していた場所や歩いた道などの調査ができ、「藤野先生」の中の描写についての考察を深めることができた。魯迅の作品においては土地、風土などは大変重要な要素である。今回の調査は国語科の定番教材「故郷」の補助教材の開発にあたって参考になることも多かった。補助教材はR7年度中に発表する予定である。



広州にて魯迅関連資料の調査



魯迅夫人の故郷調査(「溝南許地」は魯迅の親筆)



共同研究者と共に魯迅の階段教室にて(魯迅が座っていた席)

制度を利用した所感

・この制度を利用し、海外調査を行うことができました。今まで解明されていないものについての研究もでき、その成果をR7年度中に海外学術誌論文として発表する予定です。
・この制度のお蔭で共同研究者である附属中の中村麻里那先生と共に魯迅研究のための仙台調査が実現できました。附属との連携研究がより充実した形になりました。その成果の発表も今年度中にできました。
本制度を利用させていただきまして、心より感謝申し上げます。

R6年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：二橋　美瑞子

研究テーマ：昆虫の微細構造形成の分子メカニズムの解析

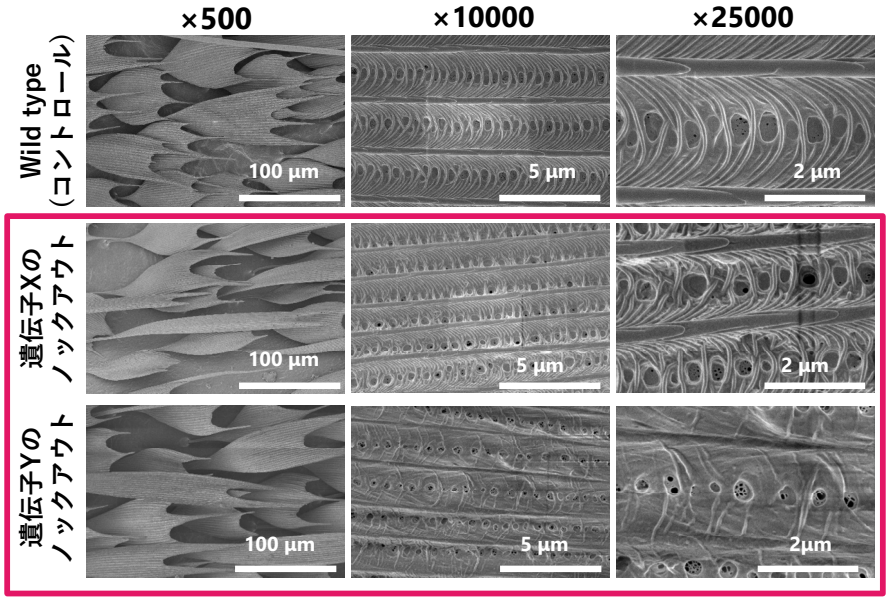
研究内容の紹介

・研究概要

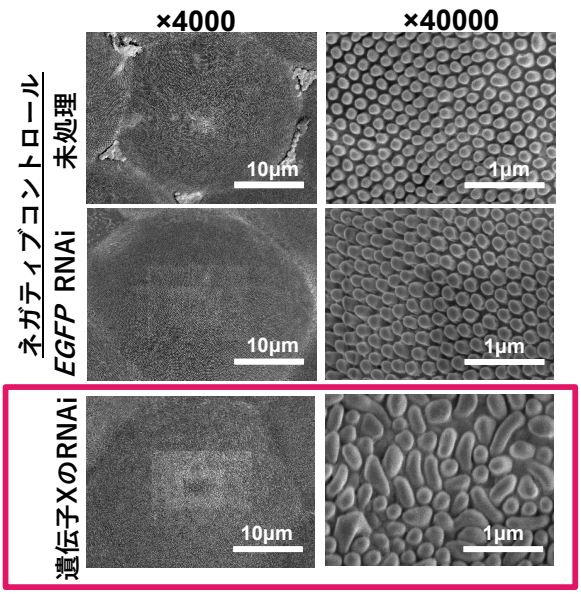
生物の表面のミクロ、ナノレベルの微細構造は肉眼では判別できませんが、生物機能にとって重要な役割を担っています。チョウ目の鱗粉でみられる微細構造が生み出す構造色や撥水性、熱放射の機能や、ガの仲間の複眼の表面のクチクラの微細突起「モスアイ構造」による効率的な集光と反射の抑制はその代表例です。これらは、生物機能の利用「バイオミメティクス」の対象としても知られていますが、その形成メカニズムの大部分は未解明でした。そこで、この謎を解き明かすため、鱗粉の微細構造が形成される時期で一過的に高発現する遺伝子を破壊したノックアウトカイコの系統化と微細構造の観察、また、微細構造形成期における鱗粉細胞の形態変化の観察を行いました。さらに、エリサンを用いて、複眼においてRNAi（RNA干渉）を用いた遺伝子機能抑制の実験系の構築と、微細構造形成に関わる遺伝子の同定を目指しました。

・研究成果

ノックアウトカイコの鱗粉の電子顕微鏡観察により、微細構造形成が異常になる遺伝子を3つ同定しました。さらに、ノックアウトカイコの飼育と交配により、1種類の遺伝子についてはノックアウト系統の樹立に成功しました。さらに、モスアイ構造を有するエリサンの複眼において、RNAiを用いた微細構造形成制御の候補遺伝子の機能抑制実験を行い、モスアイ構造形成が異常になる遺伝子を2つ同定することに成功しました。



鱗粉形成期に高発現する遺伝子をノックアウトしたカイコの鱗粉の微細構造異常の電界放出型走査型電子顕微鏡観察



エリサンの複眼微細構造形成制御遺伝子の局所的な機能抑制（RNAi）実験

制度を利用した所感

・カイコのエサや鱗粉細胞の細胞膜などを染めるための染色試薬の購入、エリサンの複眼の微細構造に関わる遺伝子を調べるためのsiRNAの合成を行うことができました。

今年度得られた成果をもとに、学生さんとともにさらに研究を発展させていきたいと思います。

・女性エンパワーメント支援制度は、萌芽的な研究の推進を後押ししてくれるよい制度だと思います。まだ利用していない方は積極的な応募をおすすめします。

R6年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：諸岡　歩希

研究テーマ：農村地域における社会生態系の変容と共存する昆虫類の遺伝的多様性の変化

研究内容の紹介

・研究概要

茅葺家屋は、数千年前から本邦に存在し里山の代表的な景観として知られる。また、里山の生物多様性の維持に貢献しており、共存する生物に営巣資源を提供するとともに、資源の循環にも重要な役割を果たしてきた。一方、近年の生活様式の変化によって、茅葺家屋の衰退は日本各地で著しい。本研究では、茅葺家屋の解体にともなう生息パッチ消失と人為かく乱の減少によって、共存する生物の遺伝構造にどのような影響を与えるのかを解解析した。里山の茅葺家屋に営巣する代表種であるハムシドロバチを対象として、研究室で約10年前から茨城県北部地域の個体群を調査しており、これらの結果と合わせて考察した。

・研究成果



茅葺に営巣するサイジョウハムシドロバチ
茅葺1棟に数千個体が営巣することもある
毎年5月ごろに多数の個体の飛翔が見られる



取り壊し中の茅葺家屋（2025年1月）
16棟を調査したうち、7棟が解体された
今年中にさらに3棟が解体される予定である

茨城県北部地域の茅葺家屋は、直近10年で約半数が消失・解体予定である。茅葺に営巣するハムシドロバチは、家屋の急激な減少により、同一地点内での近親交配が進み、遺伝的多様性が減少している傾向がある。ボトルネックやプライベートアリルの存在も確認された。また地点間（家屋間）での遺伝的分化が進行し、集団が孤立化している恐れがある。

本研究の成果は、第16回学生SDGsフォーラム(R7年3月4日，茨城大学）で発表した。



茨城県大子町の調査地点
*では、ボトルネックやプライベートアリル(固有の対立遺伝子）が検出された

制度を利用した所感

・研究を開始した10年前の研究結果については、すでに学術論文として公表している。論文の結果を踏まえ、継続的なモニターが必要になると考え、いくつか外部資金に応募していたが、不採択が続いていた。本制度に採択していただいたおかげで、研究を継続することができ、また重要な知見を得ることができた。今回の研究の結果も、早急にまとめて学術誌等で公開したい。

・以前より、募集・採択時期が早まったため使用しやすくなった。とくに生物を扱う研究は時期を逃すとできなくなってしまうため、早めに決定していただけるとありがたい。

・新規の研究や、継続性が重要な研究を行う際に、とても有用な制度であると思います。積極的に応募されることをお勧めします。

R6年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：福村　真紀子

研究テーマ：地方観光地における「ダイバーシティ・マネジメント」のための調査研究

研究内容の紹介

■研究概要

過疎化が進む地方観光地の創生の一つの方策として、多言語多文化共生社会の実現が挙げられる。本研究では、インバウンドや外国人定住者の呼び込みが比較的遅れている長野県志賀高原を取り上げ、実際の現場の実態調査を行うことにより、地方観光地における「ダイバーシティ・マネジメント」の可能性を検討した。また、比較検討のため、北海道でもインタビュー調査を実施した。 調査方法としては、観光協会、スキー場、スキー学校、宿泊施設の従業員、およびインバウンドと日本人観光客を対象とし、インタビュー調査または観察調査を行った。インタビュー調査の協力者は合計10名。調査で得られたデータは今後、質的な分析を進める。分析の見通しとしては、当該調査地は日本人顧客のニーズを鑑みながら緩やかにインバウンドを受け入れ、「ダイバーシティ・マネジメント」も急激な展開ではなく、地域独自のペースで進めていくと思われる。



【調査地】長野県（主に志賀高原）・北海道（比較対象として）

【調査協力者】スキーリゾートで観光業に従事する日本人と外国人

（以下、R7年2月現在、一部調整中）

- 宿泊施設の従業員（日本人・外国人）：4名
- ワーキングホリデービザで働くスキー場の従業員（外国人）：1名
- スキー学校の代表、校長、指導員（日本人）：3名
- フリーランスでスキーを教えるインストラクター（日本人）:1名
- インバウンド専用のスキー学校の運営者（外国人）：1名

【調査方法】多言語多文化共生を視点としたインタビューおよび観察調査

■研究成果

R３年度から同研究を推進し、その研究成果となる論文を執筆し、著書（報告者は編著者の一人）の1章として出版した。担当章では、調査地における多文化多言語化の動向について説明し、その状況を「公共性」という鍵概念を用いて分析した。本年度の調査に先立ち、著書を調査協力者たちに献本し、読んでもらった。そして、著書の感想も交えつつ質的にインタビューを行い、コロナ禍後インバウンドが急増した調査地の現状把握に努めた。本年度の調査は、スノーボール式に調査協力者の層（地域、業種、立場など）が広がった。そのため、調査日程も予定より増加・拡張し、より多層的なデータを取得することができた。R7年2月現在、全ての調査が終了していないため、分析が終了していないが、今後定性的コーディングにより質的に分析および考察を行う。

R6年度に出版した著書：『ことばの活動と公共性』編著：細川英雄、牛窪隆太、福村真紀子（明石書店）

本研究に係る論文：第11章「閉じられたスキー宿に公共性の風が吹く」

制度を利用した所感

・本制度により、複数回研究フィールドに直接赴くことが可能となり、直接フィールドを観察することがで、細かい点に至るまで新たな気づきを得た。また、これまでの調査協力者に再度話を直接聞くことができ、ラポール形成も確立した。

・昨年度は助成額が限られていたが、今年度は制度の上限近く支給していただき大変心強かった。出張費及び音声データの文字起こし費用について個人の持ち出しが生じたものの、充実した調査ができた。

・女性エンパワーメント支援制度には、いつも心から感謝している。研究テーマに制限がなく、自由なテーマでのびのびと研究ができ、研究者としてのチャンスが与えられているという充実感も持てる。

R6年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：浅木　直美

研究テーマ：ウコンによる窒素吸収とクルクミン含有率との関係解析

研究内容の紹介

・研究概要

ウコン(*Curcuma longa* L.)は、根茎部に二次代謝産物であり機能性成分でもあるクルクミンを含有しており、その薬理作用は近年関心を集めています。ウコンの生育期間は9か月前後と長く、特に生育旺盛期には多量の養分を必要とするため、より良い収量を確保するためには多くの肥料が必要となります。本研究では土壌化学性や物理性を改善する効果を有し、省力的な作物栽培ができると考えられる緑肥に着目しました。緑肥を利用したウコン栽培技術の開発・改良に寄与することを目指して、ウコンの収量・品質を向上させるために最も適した条件(土壌の理化学性)を明らかにすることを目的としました。特に緑肥由来窒素の土壌無機化パターンに着目して圃場試験を実施しました。

緑肥作物として、スィートソルガム（SS）、グレインソルガム（GS）、クロタラリアを用い、緑肥別処理区として、裸地区、SS区、GS区、クロタラリア区、混播(SS＋クロタラリア)区を設けました．2023年7月に緑肥種子を播種し、同年11月には緑肥地上部を刈り倒し、同年4月には緑肥を土壌にすき込みました。ウコンは2024年5月15日に植え付け、11月13日に収穫しました。

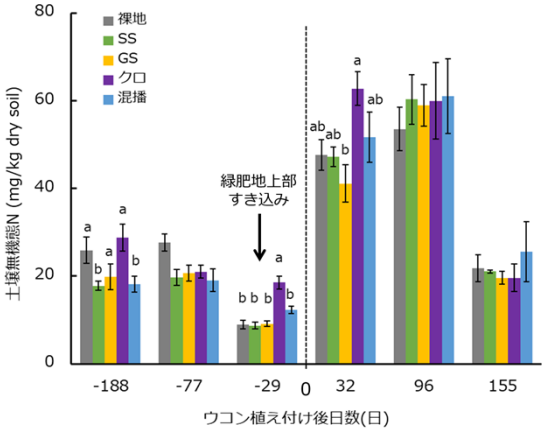
〈アキウコンの写真〉



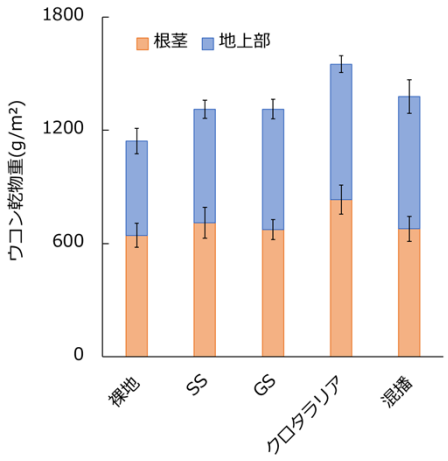
・研究成果

クロタラリア区ではウコン植え付け時から3カ月間、他の処理区に比べて土壌無機態窒素濃度が高く維持されていました。クロタラリア区ではウコン栽培初期から緑肥残渣の分解と無機化が起こっているのに対して他の緑肥区では残渣の分解や窒素の無機化が遅れました。また、収穫時のウコン根茎全乾物重も根茎中のクルクミン含有率もクロタラリア区で高い傾向でした。これらの結果より、ウコンの収量と品質を向上させるために最適な条件として、ウコン生育初期からの無機態窒素供給が重要であることが示唆されました。

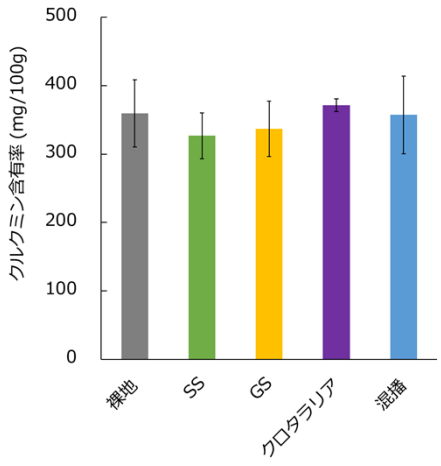
〈土壌無機態窒素濃度の推移〉



〈収穫時ウコン乾物重〉



〈クルクミン含有率〉



制度を利用した所感

・本制度を利用することにより、必要な調査や分析をより詳細に実施することができました。また、学会に学生といっしょに参加することができました。得られた研究結果をもとに学術論文を作成し、今後もこの研究を深められるよう努力したいと思います。

・本制度は、研究における新しいチャレンジを後押ししてくれるものだと感じました。本制度を利用させていただきありがとうございました。

R6年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：高瀬　唯

研究テーマ：地域社会における自然体験の世代間伝承に関する行動の既定要因の解明について

研究内容の紹介

人々が日常生活の中で自然と触れ合う機会が減少しており，将来的に生物多様性増進のための活動や環境配慮行動の減少が引き起こされるのではないかと危惧されている。その背景には「経験の消失」という問題が存在している（Pyle,1993; Soga and Gaston,2016）。経験の消失は，世代間やコミュニティ間で伝播することが指摘されている。したがって，地域社会で自然体験を世代間で伝承していくことが重要であり，自然体験を伝承する大人を増やすことが求められる。伝承人口の拡大には，大人が伝承を実行するようになる過程や要因の理解が欠かせない。そこで，本研究では，地域で大人が子どもたちへ自然体験を伝承する行動に至るまでの規定要因を明らかにすることを目的とした。

本研究では，半構造化形式のオンラインインタビューを実施し，地域で自然体験を子どもたちに伝承した経験のある市民26名から回答を得た。こ分析には，質的研究法の一種であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用いた。現時点で，インタビュー調査を行った26名のうち，11名の回答の分析を完了している。

現状では，自然体験を伝承する行動に至るまでの規定要因に関わる42の現象を特定できた。さらに，これらの現象を内容の類似性によって分類したところ，15種類に分けられた。また，環境配慮行動に関する既存の規定要因モデルである二段階モデル（広瀬，1994）やTPB理論（Ajzen, 1991）には含まれていない規定要因も把握することができた。

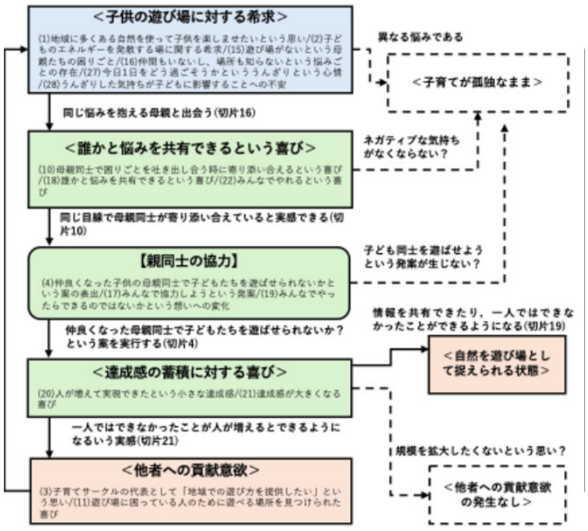


図　GTAに基づき作成したカテゴリー関連図の一例

制度を利用した所感

- 昨年度は妊娠・出産を経験し，体調や集中力の面で研究活動がほぼ停滞した1年間でありました。今年度に復帰した後もすぐに研究に本格的に取り組むのは難しく，研究を進める上で厳しい状況が続くと考えていました。しかし，本制度を活用させていただいたことで，資金面の不安なく研究を再開することができました。ご支援いただき，誠にありがとうございました。
- 本制度を活用した研究の一環として，共に研究したM2の女子学生が成果を学会で発表し，「2024年度　環境情報科学ポスターセッション　事務局長賞」を受賞しました。これにより，彼女自身の研究モチベーションが大きく向上しただけでなく，それを見た後輩学生たちの士気も高まり，研究室内が非常に良い雰囲気になりつつあります。加えて，本制度は応募段階で緻密な研究計画を求められるわけではないため，女子学生の主体的な研究姿勢を尊重しながら研究を進めることができた点も非常にありがたかったです。
- 本制度の支援を受けて得たデータは非常に質が高く，今後の研究発展に大きく寄与するものとなりました。今回の成果を活かして学術書の執筆を行いたいと考えています。また，今回は主に質的研究を中心に進めましたが，次のステップとして量的研究へとシフトし，研究のさらなる発展を図りたいと考えています。これまでの成果を土台にしつつ，より広範なデータを収集・分析することで，国際誌への論文投稿を目指します。
- 一般的な研究助成金では，すでに応募する研究テーマに関する業績がないと採択されにくい傾向があります。しかし，本制度は萌芽的な研究でも支援していただける点が非常にありがたく，まさに「エンパワーメント」を実感できる仕組みになっています。今後もこのような柔軟な支援を継続していただけると，特にライフイベントと研究の両立に苦慮する研究者にとって，大きな力になると考えます。
- 本制度は，特に，萌芽的な研究を進めたい方，研究活動の継続が難しい状況にある方研究室の若手研究者を育成したい方には非常に心強い支援制度です。 私自身，この制度を活用することで，研究活動の停滞を防ぎ，学生の成長にもつなげることができました！積極的に本制度を活用することをお勧めします。

R6年度女性エンパワーメント支援制度

研究者氏名：七夕　小百合

研究テーマ：ダイズにおける根粒形成オートレギュレーションと免疫応答の関連性の解明

研究内容の紹介

私は、令和6年4月から令和7年2月まで、大学のサバティカル制度を利用し、米国ミズーリ大学コロンビア校Christopher S. Bond Life Science CenterのGary Stacey 博士の研究室において、Visiting Researcher として研究に従事しました。本支援については、その研究費の一部として使用しました。

限られた1年弱の期間内で最大限の成果を得るため、研究室所属の研究者2名と協力し、チーム体制で研究を実施しました。滞在期間中に2つのプロジェクトを推進しました。1つ目のプロジェクトに関しては、得られた成果をもとに現在論文投稿の準備を進めています。2つ目のプロジェクトについては、引き続き研究を継続しており、最終的に論文化し投稿することを予定しています。いずれの研究に関しても、詳細な内容については現時点で公表を控えております。

制度を利用した所感

以前より若い頃に海外での研究経験を積んでおけばよかったという思いがあり、今回、思い切って挑戦することを決意しました。実際に海外での研究生活を経験し、多くの貴重な学びを得ることができ、大変有意義な時間となりました。一方で、やはり若いうちにこうした挑戦をすることには大きなメリットがあると改めて実感しました。今後は、自らの経験を活かし、若い世代の研究者が海外で積極的に挑戦できるよう、環境づくりや支援に努めていきたいと考えています。

また、異なる文化の中で研究する中で、真のダイバーシティとは何かについても深く考える機会となりました。単に多様なバックグラウンドを持つ人々が集まることだけではなく、それぞれの価値観や考え方を尊重し、互いに学び合いながら協働できる環境を築くことが重要であると実感しました。こうした視点を大事にしながら、今後の研究活動や教育に取り組んでいきたいと思います。